

佐賀市 42 歴史探訪

せい どう たくみ わざ 「青銅の匠の技」

科学の進歩に伴って現代の技術力は飛躍的な発展を遂げたといわれますが、それに勝るとも劣らない高度な技術は過去の時代にもたくさんあります。今回はその一つの例として弥生時代の青銅鏡たちゅうさいもんきょう「多鈕細文鏡」(注1)を紹介します。

この鏡は、朝鮮半島から伝来したと考えられるおう凹面鏡で、鍋島町増田遺跡かめかんぼの甕棺墓から出土しました。大きさは直径約9センチ、厚さは薄いところで約2ミリと、小型で薄く作られています。縁には幅約1センチの厚みを持った断面カマボコ形の高まりが巡り、鏡の中央付近には紐通しの穴のついた「鈕」と呼ばれる突起が3個(1つは失われていましたが)付けられていました。

この鏡の最大の特徴は、精密で極めて細い線による幾何学的な文様がつけられていることです。驚くことに、この文様は後から削り出されたのではなく、鑄型によって鑄出されているのです。これだけの精密な線をこれほど見事に鑄出すことは、現代の熟練工にとってもそう容易なことではありません。

弥生時代には、多くの青銅器とともにそれを作る技術が朝鮮半島から伝来し、日本でもさまざまな種類の青銅器が作られるようになり(注2)、独自の青銅器文化が発展しました。

この鏡は、現代でもなかなかまねのできない、当時の“匠の技”を今に伝えていきます。しかも、その高度な技は、現代においてもまだ完全には解明されていないのです。

(注1) 鈕が複数個ある「多鈕」で、文様の線が極細な「細文」の「鏡」なので、「多鈕細文鏡」と呼ばれています。

(注2) 不思議なことに多鈕細文鏡が日本で作られた形跡は確認されておらず、なぜなのかはよく分かっていません。

一口メモ

■多鈕細文鏡は、現在、全国での出土例が非常に少ない貴重なもので、今回紹介した鏡は、佐賀県重要文化財に指定され、佐賀市文化財資料館で保管されています。



▲出土した多鈕細文鏡



▲多鈕細文鏡を出土した甕棺墓



▲精密な細文(拡大)

